

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

山下俊彦（松下電器「現パナソニック」、3代目社長）の経営哲学（その2）

梅沢 正邦（ジャーナリスト、元「週刊東洋経済」副編集長、論説委員長）

1. 日本の衰退は二段階で起こった。バブルのおごりが第一段階。第二段は、バブル崩壊で周章狼狽した経営者たちがアングロサクソン流の株価第一、短期収益優先の新自由主義に飛びつき、曲がりなりにも日本の高度成長を実現した「日本型経営」を全否定してしまったことだ。松下電器も例外ではない。
2. 2000年に松下電器社長になった中村邦夫。「幸之助神話を壊した男」（森一夫、日経ビジネス人文庫）である。就任2年目、1万人の希望退職を募集した。終戦直後の混乱期を除いて松下電器は一度も人員整理をしたことがない。日本企業の聖域でもあった終身雇用制に終止符を打ったのである。さらに重大なのは就任初年度、松下電器独自の事業部制を解体したことだ。
3. しかし、山下は社長になってからも言い切った。「理想的な企業は、従業員一人ひとりの目標の延長線上に会社の目標もある。そういう姿が一番望ましいわけです」。山下は幸之助の事業部制に共振した。事業部制が事業部長、ひいては従業員一人ひとりの「個人」の主体性、自主性に大きく信を置くシステムだったからだ。もし、山下という経営資源、その経営思想が後の世代にしっかり編成されていたら、パナソニックは今のパナソニックではない。

（参考：「Wedge」2022年6月号）

経営者のための経済学

午後10時の日本経済

1. 21年度の貿易収支は5兆3749億円の赤字となった。2年ぶりの赤字だ。製造業の海外生産が定着したことで、輸出に伴う円安メリットも大きく縮小した。資源や穀物の価格の高騰を考えれば、22年度も赤字が続く公算は大きい。1980年代後半から90年代前半に巨額の貿易黒字を稼いでいた日本経済の面影はどこにもない。それどころか、資源価格の推移次第では、經常収支も赤字に転落する公算も否定できない。
2. 日本経済は年老いてしまった。現状を一日に例えるなら午後10時、終わりに近づいているかのようだ。その姿がウクライナ侵攻に端を発した経済や市場の混乱であらわになった。混迷の度を深める一方の円相場、原油価格、物価、株価、そして日本経済である。

（参考：「週刊ダイヤモンド」2022年5月21日号）

ワンポイント経営アドバイス

物価上昇が日本の強みを磨いた

小峰 隆夫（大正大学教授）

1. 1970年代に起きた2度の石油ショックは人々の暮らしや企業活動に大きな影響を与えました。2度の石油ショックの影響は異なったわけですが、継続的に物価上昇が訪れたことは日本の企業に大きな変化をもたらしました。例えば、自動車産業では燃費のいい車がどんどん造られるようになりました。「石油は貴重なもの」「大切に使わないといけない」との意識を消費者も含めて高まったことが背景にあると言えます。
2. 車だけではありません。危機的な状況だったからこそ、省エネ型という日本製品の強みが生まれ、それが80年代からの発展へとつながっていきました。では、今回の物価上昇はどうでしょう。技術革新や新たな付加価値を生み出す転機になる可能性があるのではないのでしょうか。

（参考：「日経ビジネス」2022年5月16日号）

古典に学ぶ

父より上であった

（解説）いかにも父の申された如く、その頃私は文字の力からいえば、不肖ながら或いは既に父より上であったかも知れぬ。また父とは多くの点において、不肖ながら優れた所もあったろう。

（参考：渋沢栄一「論語と算盤」：国書刊行会）